

堀口九萬一「フランス・コッペ訪問記」について

倉方, 健作
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7392967>

出版情報：言語文化論究. 55, pp.15-19, 2025-10-29. Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



堀口九萬一「フランソア・コッペ訪問記」について

倉 方 健 作

『游心録』

堀口九萬一(1865-1945)の随筆集『游心録¹』に収められた「フランソア・コッペ訪問記」は、「僕が詩人フランソア・コッペをマンドルの田舎に訪問したのは、十月の晴々した日であつた²」と始まる。フランスの詩人フランソワ・コペ(François Coppée, 1842-1908)をパリ郊外のマンドル(Mandres-les-Roses)の別荘に訪ねた折の記録であり、アカデミー・フランセーズ会員でもある詩人が都会の喧騒を逃れた生活を楽しむ様子が、生き生きとした会話の再現とともに描かれている。コペの人となりや当時の文壇における立ち位置を知るための貴重な証言と言える。

「フランソア・コッペ訪問記」以外にも、『游心録』には著者が外交官としての在欧中に立ち会った講演や、文化人との個人的な交流を記した文章が収められている。モーリス・メーテルリンクの講演に関する「メーテルリンクの講演を聞く」、作曲家マスネとの交流を語る「「マノン」の作曲家楽聖マスネの想ひ出」、また複数回訪問したという作家アナトール・フランスとの会話を再現する「文芸上の剽窃に就いて」および「アナトール・フランスと私との対話」、コメディ・フランセーズの総支配人からの伝聞をまとめた「巴里劇壇叢話」などである。こうした傾向を持つ随筆集に収められた「フランソア・コッペ訪問記」も、当然ながら実際の堀口の体験として読まれてきた。日本近現代の随筆をテーマ毎に編集した叢書の一冊にも「フランソア・コッペ訪問記」は収録されており³、堀口の随筆としては比較的目に入りやすいものに分類される。

「フランソア・コッペ訪問記」の「原文」

だが「フランソア・コッペ訪問記」は堀口の作品とは言いがたい。実際にはフランス語で書かれた雑誌記事の翻訳であり、したがって訪問自体、著者によってなされたものとは考えられない。「原文」であるアドルフ・ブリソン「フランソワ・コペ邸での一日」(« Une journée chez François Coppée »)は、文芸誌『ルヴュ・イリュストレ』(*Revue illustrée*) 1895年2月1日号に掲載されている⁴。『ルヴュ・イリュストレ』はその名のとおり挿絵、写真を豊富に掲載した文芸誌であり、ブリソンの「フランソワ・コペ邸での一日」も、当日マンドルで撮影されたいい5枚の写真によって彩られている。

一方で堀口の「フランソア・コッペ訪問記」は、その末尾に「(一千九百七年の滞仏日記中より)」と記されている。『ルヴュ・イリュストレ』誌上での初出からは12年が経過しているが、堀口の付記だけを見れば、「訪問記」は過去の雑誌から訳出した文章を日記に書き込み、『游心録』に収めたものである、という解釈も可能だろう。この場合、「フランソア・コッペ訪問記」冒頭の「僕」を堀

口として読む行為は、あくまでも読者の誤解に基づいており、他人の「訪問記」を自らの体験として提示するつもりは堀口には毛頭なかった——と好意的に捉えることも無理ではない。

しかし、アドルフ・ブリソンによる「原文」と「フランソア・コッペ訪問記」を対照すれば、堀口が意図的な操作によって、コペを訪問したのが自分自身であるかのように文章を改変している事実が明らかになる。以下に引用するのは、ブリソンによる記事の冒頭部と「フランソア・コッペ訪問記」の該当部である。ブリソンの「原文」には訳を添えたうえで、「フランソア・コッペ訪問記」との差異が大きい部分にはいずれも下線を引いた。

...Donc, nous voilà partis, M. Mairet, photographe de la *Revue Illustrée*, et votre humble serviteur. Il s'agissait d'offrir à nos abonnés des portraits de l'écrivain, saisis dans l'intimité de sa vie rustique. À dix heures précises, nous nous embarquons à la gare de Vincennes. C'est tout un voyage⁵.

(…ということで、『ルヴュ・イリュストレ』誌のカメラマンであるメレ氏と、不肖この私は出発した。定期購読者の皆様に田園生活でくつろぐ作家の写真をお届けするのが任務であった。10時ちょうどに、私たちはヴァンセンヌ駅から列車に乗り込んだ。大変な長旅である。)

……そこで僕達は出発した。僕達といふのは学友のシャルル・ブノワが同行したからである。ブノワはコッペの縁戚で且つ今日の往訪は予ねて先生に打合せ済みだった。午前十時にヴァンセンヌの停車場から出発した。遠方の田舎へでも旅行するやうな意気込みで出掛けたのだつた⁶。

ブリソンの「原文」にある誌名、同行した写真家の名前、訪問の目的はすべて「フランソア・コッペ訪問記」では抹消されている。その代わりに、コペとの媒介者兼同行者として「学友のシャルル・ブノワ」なる人物が登場している。調査の限りでは、コペの縁戚にシャルル・ブノワという人物は見出せなかった。堀口が作り上げた架空の人物である可能性が高い。

その後、マンドルへの到着以降は両者に大きな相違はなく、したがって比較的忠実な翻訳と言える。末尾に至ると、再び堀口の操作が確認される。「原文」の最終部の以下の一節が、「フランソア・コッペ訪問記」では削除されている。

Si François Coppée a voué quelque reconnaissance à la grande dame qui encouragea ses premiers débuts, la grande dame lui a gardé une sympathie fidèle... M^{me} la princesse Mathilde assistait, l'autre soir, à la première représentation de *Pour la Couronne*, et c'est du fond de son avant-scène que le poète, palpitant d'émotion, a reçu l'ovation du public⁷.

(フランソワ・コペは最初期に彼を励ましてくれた貴婦人に対する感謝を抱き続けているが、貴婦人のほうも彼に変わらぬ好意を抱き続けている… マティルド皇女は先日の夕べ、『王冠のために』の初演をご覧になり、詩人は前舞台の奥から、感動に震えつつ、観客の大喝采を受けたのだ。)

この一節が抹消された理由は、全体を削除しても意味が通り「訪問記」としての統一性を損なわないだけでなく（「フランソア・コッペ訪問記」はその直前、コペが文壇へのデビュー時を回顧する言葉で結ばれている）、訳出した場合には明らかになってしまう時代的な齟齬を避けるためであったと考えられる。ここで言及されているコペの戯曲『王冠のために』がオデオン座で初演されたのは、

1895年1月19日である。だが、さほど有名とも言えない戯曲の初演についてはともかく、問題となるのはマティルド皇女が1904年に没している事実である。社交界で重きをなしたナポレオン3世の従妹の没年を外交官であった堀口が知らなかったはずはない。この箇所を訳出すれば齟齬が明らかとなり、「フランソア・コッペ訪問記」の「私」が自分自身として読まれないという認識が堀口にあったものだろう。

「証言」の信憑性

『游心録』をはじめとする堀口の随筆に対する疑義がこれまでなかったわけではない。柏倉康夫は『敗れし國の秋のはて 評伝堀口九萬一』において、堀口が書く外国人との交流に言及し「はたして随筆に書かれているほど親密な関係を築きえたかどうかは疑問であり、彼ら文学者の直話とされるものについても、多くは雑誌や本に書かれた記事からの引用である場合もあった⁸⁾」と書いている。そうして疑いはじめれば、『游心録』には堀口自身がすべてを書いたとは思えない随筆が散見される。「ゾラの小説ナナの売出し」と第された文章はその一例である。「それは僕がルーアンの学校を卒えて巴里へ移ってから間もない時の事であつた⁹⁾」と書き出され、「なる程僕は今迄田舎の学校の寄宿舎にゐて、而して学課にばかり没頭してゐて、巴里で流行る本などには全く没曉漢となつてしまつたのだと感づいた¹⁰⁾」と続けているが、1896年に30歳を過ぎて初めて訪欧しハーグ在勤となった堀口の経歴とは噛み合わない¹¹⁾。そもそもゾラの小説『ナナ』初版の刊行自体が1881年のことである。

「フランソア・コッペ訪問記」にしても、フランス文学に通じていたり、あるいは文学的知識がなくとも細部に注意する読者であれば、信憑性に疑問を抱かせる部分は確かにあった。コペがマンドルに別荘を所有していたのは1892年から1897年までの5年間のみである。「フランソア・コッペ訪問記」では前触れもなくカメラマンが現れて写真を撮影する場面がある。珍しいはずの日本人の訪問者であるのにコペが会話でそのことにまったく触れない。コペが自身の文壇へのデビューを「30年前」と語っているが1907年には「パルナス派」としての登場から40年以上になる計算である、等々。こうした疑義を抱かせることなく「フランソア・コッペ訪問記」が随筆として読まれた背景には、なにより堀口の訳文の巧みさがある。いわゆる「翻訳くささ」がなく、『游心録』に収められた他の随筆と比べても、語彙の選択や文体に大きな違いは感じられない。

なぜ堀口はこのような操作をしてまで「フランソア・コッペ訪問記」を『游心録』に収めたのか、その意図は不明である。1896年のオランダ在勤を皮切りに、ヨーロッパとアメリカ大陸の各国で四半世紀以上外交官を勤めた堀口は、1925年3月の依願免官後は講演と執筆に取り組んだ。「外国文豪の中で、僕が一番よく知つてゐるのは、今現に生きてゐるモーリス・メーテルリンクと、フランス詩壇で、プリンス・デ・ボエート桂冠詩人の榮譽をもつたポール・フォールと先年物故したアナトール・フランスとの三人である¹²⁾」といったような文章にも、いささかの虚栄が含まれているようだが、このように書かざるをえなかった背景には、外交官としての出世コースを歩まなかった堀口自身の心理や、文筆をするうえでの戦略があったと思うほかない。堀口にとっての最初の随筆集である『游心録』において、外交官時代の生活や交流を実像以上に華々しく文化的なものとする意図が働いた、と現時点では結論づけておきたい。

注

- 1 堀口九萬一『游心録』第一書房、1930年2月。
- 2 『游心録』、p. 159。
- 3 宇野信夫編『日本の名随筆74客』作品社、1988年12月。
- 4 Adolphe Brisson, « Une journée chez François Coppée », *Revue illustrée*, 1^{er} février 1895, p. 117-125.
- 5 « Une journée chez François Coppée », p. 117-118.
- 6 『游心録』、p. 159。
- 7 « Une journée chez François Coppée », p. 125.
- 8 柏倉康夫『敗れし國の秋のはて 評伝堀口九萬一』左右社、2008年10月、p. 182-183。なお柏倉も指摘しているが、随筆集『外交と文芸』（第一書房、1934年7月）で詩人マラルメの逸話を語る際に、堀口はアドルフ・ブリソンの記事から引用をおこなっている。同じくブリソンの過去の記事をどのように見つけて「フランソア・コッペ訪問記」として訳出するに至ったのかは、今後のさらなる調査を必要とする。
- 9 『游心録』、p. 48。
- 10 『游心録』、p. 49。
- 11 柏倉も堀口自身の見聞ではない可能性を指摘している（『敗れし國の秋のはて 評伝堀口九萬一』、p. 73-74参照）。
- 12 『游心録』、p. 283。

About Horiguchi Kumaichi's "A Visit to François Coppée"

KURAKATA Kensaku

"A Visit to François Coppée", included in the essay collection *Yushinroku* (1930) by diplomat Horiguchi Kumaichi (1865-1945), has been read as an essay that vividly depicts the life of French poet François Coppée (1842-1908). However, it is actually a translation of a visit that was published in a French magazine *Revue illustrée* in 1895. When compared to the original text, there are some manipulations and alterations that make it appear as if Horiguchi himself had visited the place. As for *Yushinroku* as a whole, the testimony must be treated with caution.